

Malcolm D. Lambert, *Medieval Heresy: Popular movements from Bogomil to Hus*, 1st edition: New York, 1977; Id., *Medieval Heresy: Popular movements from the Gregorian Reform to the Reformation*, 2nd edition: Oxford, 1992, 3rd edition: Oxford, 2002.

マルコム・D・ランバート著

『中世の異端：ボゴミールからフスまでの民衆運動』（初版 1977）

『中世の異端：グレゴリウス改革から宗教改革までの民衆運動』（2版 1992，3版 2002）

草 生 久 嗣

「中世の異端」は西洋中世史上の重要概念となって久しい。専門類書は言うに及ばず、「中世の異端」という直截なタイトルでの各国語の概説出版も大小後を絶たない。本邦でもH・グルントマンの今野國雄訳や甚野尚志の山川リブレット、小田内隆の近業を直ちに挙げるができる。本稿で取り上げるマルコム・D・ランバートの『中世の異端（初版，2版，3版）』は，そうした概説文献の代表格にあり「重要な研究成果に則した総合的かつ詳細，精確なガイド」（P・ビラー）として，版を重ね参照されてきた。英語類書としてはヘンリー・Ch・リー（『中世の異端審問』1888年）以来の重要業績と評され，J・B・ラッセルはH・グルントマンの主著『中世における宗教運動』（第2版，1961年）に匹敵する地位を与えている。リーの伝統を継ぎ，グルントマンのアプローチを踏襲した

と表明するランバートにとって面目躍如であったろう。

『中世の異端』初版の出版は、三十五年前。第3版の出版からもすでに十年を経過する。改めて本書をこの場で取り上げるのは、本書の出版自体を研究史上の材料とみため、その性格を研究動向の中に位置づけるためである。具体的には、版による叙述の相違を比較検討することで発展する「教科書」としての方向性を相対化し、今後の展望の開拓に寄与したい。評者の見るところ異端研究は、異端学の研究、すなわち異端を見る眼と異端学者たちの研究でもある。ランバートの教科書という格好の題材を得て、本稿は異端学上の試みの一つとして位置づけられよう。

本書において取り上げられている異端者群像は以下の通り。東欧二元論異端(初版のみ)、十一世紀西欧の群発異端、十二世紀西欧の説教修道者異端、カタリ派、ワルドー派(3版にて叙述拡幅)、自由心霊派、ヨアキミストおよびドルチーノ派、ベギン、ウィクリフ、ロラード、フシーテン運動、モラヴィア兄弟団(2版から)。いずれも中世異端史における代表者たちである。十二世紀異端の前に教会改革(グレゴリウス改革)について、またカタリ派・ワルドー派の叙述のあとに、異端審問制度についての章を設けるのも、定番の章立てである。

ランバートの『中世の異端』は、異端学における伝統的ジャンルの一つ「宗派史」に属する。これは近世以降、新教諸派の成立とともに発達したもので、それ以前の博物学的な「異端カタログ」でもなく、「正統教義史・公会議史」の裏面史でもなく、理論的論駁を目的とした「護教書」や、法執行のための「指南書」でもない。近代歴史学を通じて中世異端に触れる機会の多かった我が国では、最も馴染みのジャンルである。宗教改革を支持し、中世教皇座を批判するトーンが目立つのもジャンルの個性と言えよう。ただしランバートの本書は、その中でも客観的な教科書として適切な部類に属する。

三つの版を通じてその教科書としての特徴は、大きく三つある。第一に、異端についての実証研究史を丁寧に取り込んだ「模範的総合叙述(ラーナー)」であること。著者は他にもフランシスコ会およびカタリ派について単著を著す(後掲著作リスト参照)が、東欧異端やフシーテン運動他、著者が史料言語を解さないテーマや、研究者層の厚い題材については、業績参照に徹する。もちろん、それらの成果を取り入れるにあ

たって批判的視点を失うことなく、註に掲載された書誌情報を改訂に際してアップデートし、文献を紹介する際も一言、二言彼なりの味のあるコメントを付す。第二は異端者たちを主役とし、彼らの活動を叙述の軸に据えていることである。異端の問題は、異教的神学、地域共同体論、異端審問制度など多くの他の切り口を伴うが、叙述の中心はあくまで異端者たちと揺るがない。一方、審問制度に関する章は叙述量も改版での改稿もきわめて乏しい。また方法論一般については、全体の序章で触れるにとどめ、各章ではもっぱらその当該異端についての史実叙述が、膨大な情報量とともに物語られる。結果、各章が大型の事典項目記事のようになり、信頼されているためであろう、評者は米国の大学の授業読書課題（宿題）に、関連異端の章が切り出されて指定されているのを見た。ビラーの言うとおりの「古き良き経験主義史学」の精華といえる。第三の特徴は、改訂による版ごとの変更が質量ともに大きいことである。三訂までに、のべ百数十箇所の変更が見て取れる。そこには叙述・書誌情報のアップデートにとどまらず、著者の異端問題に向き合う姿勢にも進展がみられるほどである。こうした改訂は良心的であるが、読者は参照に際していちいち原版を確認する必要があるだろう。

版ごとの変更委細を考察する紙幅はないので、以下本質的な点に絞って論じたい。初版から第2版への変更内容は、なによりも改められた副題が物語っている。すなわち「中世の異端」の地域的枠組みが西欧世界に限定、時代的枠組みも1世紀ほど引き下げられた。その意図するところは明白で、中世の異端運動が教皇庁の改革と共に登場し、宗教改革に接続するとする古典テーゼの強調である。「改革と異端は双子」"Reform and heresy were twins. (2版390頁=3版415頁)" という文言が言明され、第3版へも引き継がれる。改訂は、大きく東欧二元論異端章および十一世紀異端についての叙述の簡略化、およびフシーテン運動に接続するボヘミア兄弟団についての叙述の充実（二章分の追記）という形でなされた。ここでは前者のみ取り上げる。初版でみられたブルガリア発のビザンツ帝国経由のボゴミール派が、カタリ派に直接連続するという立場は、研究動向をふまえ第2版において排除された。B・ハミルトンら強固な東方関係論者の存在について言及しながらも、関連個所のほとんどを削除している。該当段落だけがすっぱりと切り抜かれたところも

ある(初版 43 頁と 2 版 39 頁を比較)。この結果、中世の異端史があくまで西欧史から発する問題としてとらえなおされ、東欧史の事情はこの異端史の教科書の埒外に置かれることとなった。

第 2 版への改訂で東欧異端を見失い、その教科書標題の価値を減じた点は残念である。ただし、ランバートが改革理念＝異端運動の多数説を支持し『中世の異端』に教科書的一貫性を持たせようとした処置としてみれば、やむなしともいえよう。そもそもビザンツ世界では、宗教的な「改革」や「民衆宗教運動」なる研究概念がうまく定着しないという事情もある(草生 2008 年参照)。ただし古代末期以降の地中海世界は、ひと時たりとも異端問題と無縁ではなかったことは強調しておきたい。ビザンツ社会にも神学論議にとどまらない国政や地域住民を巻き込んだ異端騒動は頻発していた。紀元千年ごろによく異端らしい異端が再登場したと想定すること自体、西欧型改革運動史観のレトリックにすぎない。しかしビザンツ学の方で異端運動一般を論じる出版に乏しかったのも事実であり、改訂に際して二次研究を丁寧に渉猟して判断した著者を責めるわけにはいかない。ランバートは別途ボスニア教会の論文、および『カタリ派』で東欧例に言及しており、情報を意図して欠いたわけではない。とはいえ、初版の補遺(Appendix)に掲載されていた東欧および十一世紀異端の見やすい一覧表までもが削除されたことは惜しまれる。

第 2 版から第 3 版への改訂は、初版から第 2 版へのそれとは異なった意味合いを持つ。メジャーアップデートとはみなされなかったせいか、三版への学術書評は少ない。(インターネット上での記名書評はいくつか散見される)。しかし、第 3 版にもまた、初版から第 2 版への移行とは異なった意味合いでの、著者の主張表明を見て取れよう。第 2 版出版以降、中世異端研究において台頭した動向は、「脱構築」的立場であった(3 版序章 9 頁以下参照)。史料基盤そのものを疑い、異端の存在を歴史上の所与のものとしてせず、同時代において異端を見出す眼をもつ誰かによって構築されたとする立場といえようか(Head 2007 年他を参照)。その結果研究者の視線は、「異端を作り出すシステム」の方に向かうこととなる。異端問題は、「宗教運動(グルントマン)」の実態としてではなく、「迫害社会(ムア)」の発生を示し、同時代社会の問題をみてとる指標として検討対象となる。そしてかつてコーンが提起し、ギブンやベグのアプローチ

チが示すように、異端学者や異端審問官こそ「中世の異端問題」の核心に近い存在となった。

しかしこうした動向は、異端という名に負う精神的・知的存在にロマンを感じ、彼らの活躍に例えば正しき選良のリーダーシップ、近代を先取りしたイデオロギーや純粋なナショナリズム、あるいは地域心性の顕現を求めるタイプの研究とは方向性を異にする。カタリ派にはカタリ派の、フシーテン運動はフシーテン運動の歴史的役割を期待するような議論を根底から揺るがす。異端の歴史を「改革の民衆運動」の物語(history)として描きたかったランバートには、受け入れるのは困難であったろう。ランバートは第3版序文において、そうしたアプローチに立つ近年の研究動向、その注目すべき成果も正しく紹介している。しかし続く諸章の改稿にそれが積極的に反映されることもない。その一方で、ヴァルドー派についての2版からの叙述を充実、とくに第3版では1218年以降のヴァルドー派後日譚、およびロラードについての叙述を拡幅する。ワルドー派は、ランバートにとって「十二世紀における放浪説教運動の代表であり、制度教会によって不当にも異端に貶められた改革運動の例(初版67頁=2版62頁=3版70頁)」として理想的であったからである。つまるところ3版への改訂は2版での路線選択を強化し、かつ方法論的な転回には沿わないという選択をしたとみてとれる。

しかしながら「宗教運動」や「改革運動」の議論には、池上俊一がそうしたように隠修士や少年十字軍なども取り込まれているべきであった。また中世異端論を支えてきた概念的柱の一つ「民衆異端」という用語についても、小田内隆による問題提起がある。中世異端を改革運動に結び付ける史観には、再検討の余地が広く指摘されつつあるといえよう。また、ランバートがその異端史の教科書から「異端」扱った東欧異端たちが、改めて自己主張を始めていることも看過できない。旧くからの論客B・ハミルトンの史料訳書集の刊行は当然としても、フラセットやテイラーら現在の論客たちも、ボゴミールの存在から異端を語る。ハミルトンの協力者Y・ストヤノフは、東西欧における二元論系譜を論じあげ、ベストセラー(三浦清美訳『ヨーロッパ異端の源流』)にした。ストヤノフの出自でもあり、ボゴミール派の「母国」であるブルガリアでは同派について充実した文献目録がいくつも出版され、2011年8月の国際ビザ

ンツ学会ソフィア大会のセッションには、ボゴミール・異端学について評者を含めた各国からの報告者が参集する。そのコーディネーター、G・ヴァシレフは、ボゴミール＝カタリ精神伝統を英文学上に論じた出版を英文で果たしており、東欧ボゴミール研究の再興の意気盛んといえよう。

ランバートの総合叙述は教科書の役回りの良書の常として、今後更に見直しを迫られる部分が明らかになろう。健筆なランバートのこと、もし第4版が用意されているならば、改めてこうした動向に著者がどう向き合うか、注目に値する。

著者マルコム・D・ランバートは、英国プリストル大で1990年頃まで教鞭をとったあと退職、執筆活動に専念してからも地道な研究蓄積を積み上げている。1961年の著作出版時にレディング大の assistant lecturer の肩書であったからベテランである。モノグラフの準備段階で、その途中経過報告とでもいうべきエッセイ論文を発表し、また親しいテーマの書物が出版されるたび、精力的に書評を著している（書評のリストは、International Medieval Bibliography を参照）。本書『中世の異端』で有名であるが中世学者としての関心の所在はもっと広く、前近代キリスト教社会における民衆信心にある。昨2010年には、中世英国史におけるキリスト教受容についての新著を上梓した。この最近著については専門家による紹介・書評を待ちたい。

【謝辞】

評者は神崎忠昭教授（慶應大学）より、重要な中世異端専門書群の貸与を受けており、本稿の執筆には裨益するところ多かつた。この場を借りて心より感謝申し上げる。

[マルコム・D・ランバート著作抜粋一覧]

M. D. Lambert, The Franciscan Crisis under John XXII, in *Franciscan Studies* 32 (1972), 123-143.

—, *Franciscan Poverty: the Doctrine of the absolute poverty of Christ and the apostles in the Franciscan Order, 1210-1323*, London 1961 (=New York).

- . *Medieval Heresy*, 1st ed. 1977.
- . The Motives of the Cathars: Some reflections, in *Studies in Church History*, vol. 15 (1978), 49-59.
- . *Medieval Heresy*, 2nd ed., 1992.
- . Catharisme et bon sens populaire, in *Collection Heresis VI* (1993), 193-214.
- . Le problème des chrétiens bosniaques, *Heresis* 23 (1993), 29-50.
- . Catharism as a Reform Movement, in *Häresie und vorzeitige Reformation im Spätmittelalter*, ed. by F. Šmahel, München (1998) 23-39.
- . *The Cathars*, Blackwell Publishers, 1998.
- . *Medieval Heresy*, 3rd ed., 2002.
- . *Christians and Pagans: The Conversion of Britain from Alban to Bede*, Yale University Press, 2010.

〔本稿で言及した文献〕

- 『中世の異端』書評（抜粋）：初版書評 R. E. Lerner, (*Speculum*, vol. 53 (1978), no. 4, pp. 821-824); B. McGinn, (*Church History*, vol. 47 (1978), no. 2, pp. 221-223); R. I. Moore (*The English Historical Review*, vol. 93 (1978), no. 367, pp. 381-383); J. B. Russell, (*The Catholic Historical Review*, vol. 65 (1979), no. 2, pp. 350-352). 2版書評 R. E. Lerner, (*Speculum*, vol. 69 (1994), no. 3, pp. 820-821); J. B. Russell, (*Catholic Historical Review*, vol. 79 (1993), no. 1, pp. 145-146); 3版書評 M. Pegg, (*Journal of Religious History*, 29 (2005), no. 1, pp. 82-84).
- H. グレントマン, 今野國雄訳『中世異端史』創文社 (1974).
- ユーリー・ストヤノフ著, 三浦清美訳『ヨーロッパ異端の源流——カタリ派とボゴミール派』平凡社 (2001).
- 池上俊一『ヨーロッパ中世の宗教運動』名古屋大学出版会 (2007).
- 小沢実「西洋中世の民衆宗教運動」『クリオ』22号別冊 (2008) 9-17.
- 小田内隆『異端者たちの中世ヨーロッパ』NHK (2010).
- 小田内隆「「民衆異端」パラダイムの再検討——二項対立を越えて——」『立命館文学』597 (2007), 240-255.
- 草生久嗣「ビザンツの「民衆的宗教運動」とその「靈性」について」『クリオ』22号別冊 (2008) 63-72.
- 甚野尚志『中世の異端者たち』山川出版社 (1996).

- P. Biller, The historiography of medieval heresy in the United States of America and Great Britain, 1945–1992, in *The Waldenses, 1170–1530: Between a Religious Order and a Church* (Variorum CS676) 2001, II. (originally 1994).
- Heresy and literacy, 1000–1530*, edited by Peter Biller and Anne Hudson, Cambridge University Press, 1994
- Christian dualist heresies in the Byzantine world, c. 650–c. 1450*, B. Hamilton et al., Manchester University Press, 1998.
- M. Frassetto, *Heretic Lives: Medieval Heresy from Bogomil and the Cathars to Wyclif and Hus*, Profile Books Ltd., 2007.
- J. B. Given, *Inquisition and Medieval Society: Power, discipline, and resistance in Languedoc*, Cornell University Press, 1997.
- Th. Head, Naming Names: The Nomenclature of Heresy in the Early Eleventh Century. In R. Fulton and B. W. Holsinger (eds.), *History in the Comic Mode: Medieval Communities and the Matter of Person* (Columbia University Press, 2007), pp. 91–100.
- R. I. Moore, *The formation of a persecuting society: power and deviance in western Europe, 950–1250*, Basil Blackwell, 1987
- M. G. Pegg, *The Corruption of Angels*, Princeton, 2001.
- C. Taylor, *Heresy in medieval France: dualism in Aquitaine and the Agenais, 1000–1249*, Royal Historical Society/Boydell Press, 2005.
- G. Vasilev, *Heresy and the English Reformation: Bogomil-Cathar Influence on Wycliffe, Langland, Tyndale and Milton*, Mcfarland & Co Inc Pub., 2007.